第 17 回日本在宅医学会もりおか大会　**一般・指定演題**

（研究報告）抄録用紙

演題名 （全角 80 字以内）	東大病院におけるリウマチ在宅相談外来の取り組み
演者名	山口　優美
所属	１）東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科 ２）医療法人社団康明会　康明会荻窪クリニック

研究方法 （右から番号を選び NO.欄に番号をご記入ください）	1.症例報告　2.症例シリーズ報告　3.コホート研究 4.症例対照研究　5.調査研究　6.介入研究　7.二次研究 8.質的研究　9.その他研究	NO. 9

目的　大学病院における難病専門外来には、物理的に通院不可能となるイベント（骨折・肺炎）まで通院継続する高齢患者がおり、緊急入院のリスクや家族の付き添いなど介護負担が大きい。そこで、リウマチ・膠原病を有する外来患者を対象に、通院困難となってくるタイミングで地域の医師に紹介し共に診療していただき、病院専門医と並走しながら最終的に患者を地域につなげていくモデルの構築について研究する。

方法　当院アレルギー・リウマチ内科通院中の患者で、・外来に付き添いを必ず要する・要介護認定を受けている・75 才以上・他にかかりつけ医を持たない者を対象とし、リウマチ在宅相談外来に紹介受診、右記内容（介護度、病歴、身体機能（HAQ)、認知機能（HDS-R, MMSE）を含む高齢者総合的機能評価（CGA)、患者や家族の希望（在宅または通院)）を評価する。当外来より地域の医師に紹介し、3-6 か月に１度病院専門外来に受診するしくみをとる。

結果と考察　当外来に紹介された 5 例を検討した。地域への移行が困難な要素として、・東大に長く通院し、・日中独居で普段の状況が家族も把握不十分、・何かあれば救急車で東大病院に来た方が早いと言われる家族が 2 例あり、かかりつけ医の重要性を啓蒙する必要があると考えた。

　リウマチ在宅相談外来を通して、かかりつけ医と病院専門医がともに患者の病状理解を共有し、切れ目のない医療を患者に提供でき、安心して在宅療養を継続できる。更に普段からの病状コントロールで予期せぬ悪化からの緊急入院を抑制でき、患者・家族の満足度につながる。また、一人の患者に対し、チームとして病院専門医・かかりつけ医が最期まで関わることで、かかりつけ医はいつでも専門医に相談できることで心的負担感を軽減し、難病の在宅受け入れのハードルが下がり、地域移行症例を増やしていける可能性がある。他の慢性疾患においてもこの取り組みは有効と考えられ、今後も継続していく予定である。